

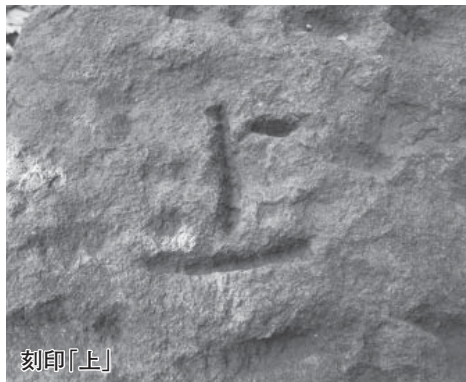
今に残る

越中島の幕末



切石

切石(東京海洋大学 越中島キャンパス グラウンド脇)



刻印「上」



切石の矢穴(切り出す時のクサビの跡)

下町文化

NO. 262
2013.7.12

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.
lg.jp/

- 古写真の中の江東
豊洲遠望
- 江東歴史紀行
関東大震災以前の清澄庭園
- 江戸の町内探訪⑥
越中島町
- 平成 24 年度文化財講演会講演録
最幕末期の江戸湾防備
—品川御台場と越中島御台場—
- 囲炉裏ばた (旧大石家日記) ⑭
旧大石家住宅の年中行事

越中島と砲台

幕末期、砲台が越中島に存在していたことをご存知でしょうか。幕末期の砲台といえば、近年賑わいを見せるお台場が有名ですが、実は最近の研究によつて、元治2年(1865)2月、越中島にあった幕府訓練場内に砲台が完成していたことが分かりました。その後、明治30年代に商船大学(現在の国立大学法人東京海洋大学)の転入・整備により埋め立てられたため、砲台の遺構は現在確認できません。しかし、推定地周辺に砲台の構築材と推定される切石が確認されたことから、平成22年、江東区の史跡「越中島砲台跡」(越中島2-1)として登録されました。これを受けて、昨年10月の文化財講演会では、品川区立品川歴史館の富川武史氏を講師としてお迎えし、越中島や品川の砲台(御台場)を中心に幕末期の江戸湾防備についてお話しをいただきました。今号では、その講演会の要旨をはじめ、越中島の歴史、あるいは「古写真の中の江東」(豊洲)など、いろいろな角度から越中島とその周辺を取り上げています。

なお、次号は前述の切石について、調査結果の概要を報告する予定です。

豊洲遠望

江東区には、昭和30年頃に撮影した古写真が多く残されています。当時、2年後の『江東区史』（32年刊）上梓に向けて、区内各所の風景を写真に収めていたからです。カメラが貴重な頃、人々が撮影した写真の対象は、その多くが人物でした。そのため、東京オリンピック以前の首都東京の姿を写した風景写真は、町の変遷を知る上で貴重といえます。そのような古写真の中には、どのような「昔の世界」が広がっていたのでしょうか。

今回は、豊洲の遠望写真を取り上げ、当時の風景に注目してみたいと思います。

豊洲の歴史

豊洲は、越中島の南に位置します。ゆりかもめや東京メトロ有楽町線を通り、駅周辺には高層ビルのオフィスやマンションが立ち並びます。まさに、東京の現代的な都市景観を呈する地域といえます。しかし、60年ほど前の昭和30年頃には、想像もできないほど現在とは違った「世界」が広がっていました。

そもそも、「間の洲」^{あいす}（『江戸砂子』と呼ばれた砂洲が形成されていたこの

あたりは、江戸時代には、深川浦などの漁場でした。明治以降になると、この豊かな海が広がる辺りは、ヒビ建場となり、漁業に加え、海苔養殖が盛んに行われました。その後、大正末年頃から埋め立てが始まると、埋め立てられた土地は、昭和8年に深川区に編入され、同12年には豊洲1～5丁目の町名が付されました。戦後になると、3丁目地先に石炭埠頭が築造され、4丁目地先には工場や発電所ができるなど、埋め立て地として広域的な利用が展開しました。

昭和33年の住宅地図から、豊洲1～5丁目の土地利用を見ると、1・2丁目は企業用地として、3・4丁目は企業のほか個人住宅の用地として、さらに5丁目は個人住宅と小・中学校が設けられていたことがわかります。

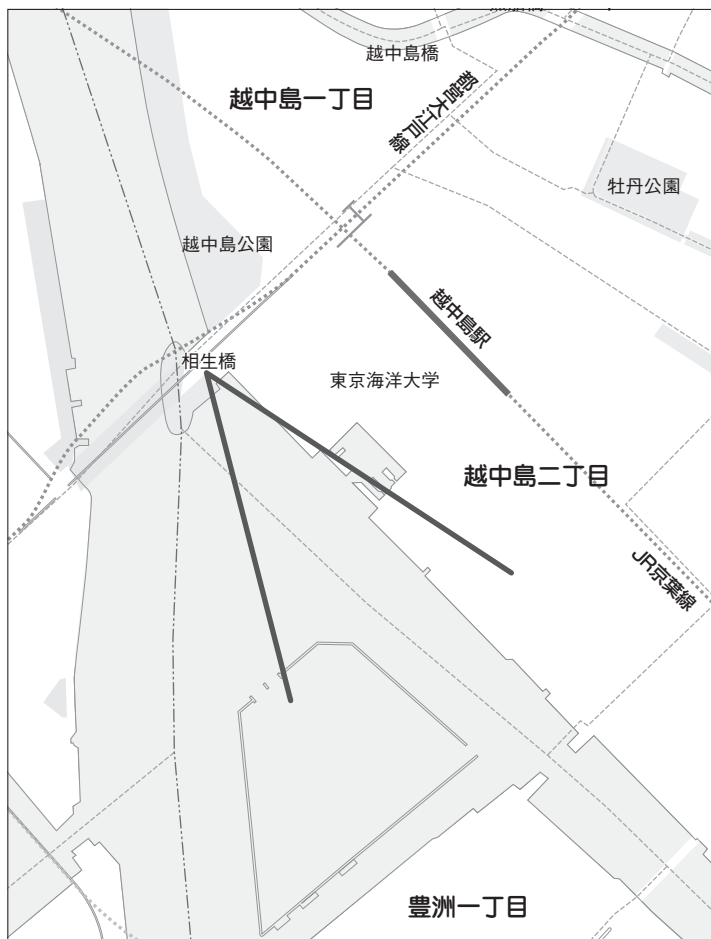


写真1 昭和30年頃の豊洲

古写真の「世界」

写真1は、東京オリンピック以前、昭和30年頃の風景を撮影したもので、相生橋から豊洲運河方面にレンズを向けています（図参照）。左側に見える堀は、越中島の東京商船大学（現東京海洋大学）で、正面には帆船が浮かんでいます。その先は豊洲運河、その運河を挟んだ右側の土地が豊洲になります。ちなみに、手前の商船大学内にも帆船の先端が見えますので、こちらが明治丸で、正面にある船は別の帆船とされます。

写真2は、現在の豊洲をほぼ同位置



写真の撮影方向(2枚とも)



写真2 現在の豊洲

景の変化だけでなく、日本の経済成長期を挟んだ60年という時間が、臨海部の役割を大きく変えたことを読み取ることができます。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

関東大震災以前の

清澄庭園

江東区清澄にある清澄庭園。現在も都会のなかの憩いの場であり、多くの人々が訪れます。しかし、関東大震災以前の庭園は、現在西隣りに隣接する清澄公園も含んだ広大な敷地で、東側（現在の庭園側）には日本館（河田小三郎設計）が、西側（公園側）には洋館（ジョサイア・コンドル設計）が建てられていました。江戸時代には、関宿藩（現千葉県野田市）下屋敷を中心とした武家地でしたが、現在の清澄庭園は、その跡地を三菱の創始者岩崎弥太郎が購入したことに始まります。

深川親睦園

岩崎弥太郎が土地を購入したのは、明治11年（1878）です。その2年後の同13年には、「深川親睦園」と名付け、来客の接待や社員の慰安の場としました。そのため、弥太郎は庭園の整備を行い、全国各地から集められた名石が、庭園にある池の周辺各所に配置されました。

弥太郎が没すると、明治18年（1885）に弟の弥之助が2代目を引き継ぎ、庭園は完成しました。汐入りの廻遊式庭園



震災前の庭園（現清澄庭園側）

で、隣接して流れる隅田川から水を引き、隣接して流れる隅田川から水を取った大泉水は、汐の干満で庭園内の池の水位が上昇、下降を繰り返して、海さながらの環境が再現されていたようです。そのほか、築山（富士山）や枯山水など、名石とともに景観を構成する要素が設けられ、周辺とは異なった空間を形成していました。

岩崎家3代目久弥の事跡を著した『岩崎久弥伝』には、ここには「旧幕時代から大名屋敷の池庭があった。弥太郎はそれらの庭を改修し、これを総合拡張して新たに林泉の布置を定めてここに一大庭園を造築した」とあり、もともとあった大名庭園を基礎としたことがわかります。また、『清澄庭園』（北村正信著）や『造園雑誌』（井上清談、

1956年）には、幕末から明治維新の混乱で、大名庭園は荒廃を極めていたと、購入当時の様子が記されています。

清澄庭園の造園技法

荒廃した大名庭園を基礎に、造園された親睦園について、明治末～大正期に宮内省の庭園技師を務めた造園家椎原兵市は、その著書『現代庭園図説』中の「岩崎別邸の清澄園」と題された一文で、大正末の清澄庭園を次のように評しています。

庭園はもと久世・戸田・黒田家などの大名屋敷で、維新で荒廃したにもかかわらず、「林泉の面影」や「老樹巨石」が少なからず残存していたと、庭園整備前の様子を記したうえで、造園に関しては「江戸時代の系統に属する廻游的潮入林泉」で、「他の類型的のものと異り極めて巧妙にして雄大な地割と配置を有し」ていること、岩組については、その手法が「錯爽の跡もないでもないが局部的には何れも優秀な技巧を発輝（はつ）され」ていること、さらに「写景的場面の多い廻游的の庭に於て且つそれが多くの造庭師に依って作られたにも拘らず大なる破綻もなく相調和統一されている点は実に感嘆に値すべきものである」こと。そして、最後は「三菱船腹」を利用して運搬した庭石は、



震災前の庭園と洋館（現清澄公園側）

「遠近を論ぜず各地より品質形状の優秀にして奇抜なる奇巖珍石を多く蒐集して造営されているのは本園の誇りであろう」との言葉で締めくくっています。

この書籍は、大正13年（1924）3月に刊行されましたが、前年の9月には関東大震災が発生し、清澄庭園にも多大な被害を与えました。この評は、震災以前の清澄庭園に関するもので、そこに「感嘆に値すべきもの」と記されている点が造園技術の高さを示しているといえます。

この庭園は、震災後の大正14年に東側約半分（15541坪）が東京市に寄付され、「清澄庭園」として市の公園に加えられました。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

越中島町

今回は、隅田川の河口部に位置する越中島の歴史について、文政11年(1828)に御府内の町が書きあげ、幕府が編さんした『町方書上』(国立国会図書館所蔵、以下『書上』と略す)の記述を中心にお話いたします。

越中島と榊原越中守

越中島が絵図に登場するのは、17世紀後半からと考えられます。明暦3年(1657)の大火直後の作成といわれる「明暦江戸大絵図」(三井文庫所蔵)には、越中島は確認できませんが、寛文11年(1671)「新板江戸外絵図」(東京都公文書館所蔵)には、越中島の位置に島状の土地が形成され、「榊原越中」と記されています。

また、同じ17世紀後半の内容を示すと推察される「深川絵画図」(江東区教育委員会所蔵、以下「絵画図」と略す)には、同じ位置の土地に「榊原越中守上り屋鋪」と記されています。このことから、以前この土地は榊原越中守の拝領地だったことがわかります。『江東区史』(昭和32年刊)では、その拝領時期を明暦、万治(1655～61)頃としています。

このように、「越中守」こそ、越中



深川絵画図(部分)

島と呼ばれる由来であると考えられています。文政4年(1821)の『葛西志』には、「此地は昔海中の孤島なりしを、榊原越中守某に賜ひし處なり。よりて越中島とは唱へたりしに」とあります。また、いつ頃からそう呼ばれたのかについては明確ではありませんが、享保17年(1732)『江戸砂子』に「越中嶋 永代嶋の海手 榊原越中守殿やしきの跡也」とあることから、この頃には一般的な呼称であったものと思われる。

榊原越中守とは

それでは、のちの越中島を拝領していた榊原越中守とは、どのような人物だったのでしょうか。

『書上』によれば、駿府城代支配の久能山惣御門番という役職についていました。大名・旗本の系図をまとめた『寛政重修諸家譜』によれば、幕府直臣(旗本1800石)の榊原照清という人物のようです。勤めのある山で、久能山は、現在の静岡市にある山で、徳川家康が元和2年(1616)に没したあと、翌3年に日光山に移されるまでの間、この地に埋葬されたという、徳川家とは深い縁をもつ大切な場所です。幕府役職の就任・辞任の年月日、就任者をまとめた『柳営補任』によれば、照清の父照久が慶長12年(1607)に久能山惣御門番の役につくと、代々同家がこの役を勤めました。

越中島の土地利用

さて、照清が拝領した島は、どのような環境に置かれていたのでしょうか。すでに17世紀後半には土地を形成し、「武士地御拝領の御屋敷」(『書上』)となっていました。しかし、絵図に見えるこの島状の土地は、風が強く、高波によつて徐々に屋敷地が流出するたため、のち榊原氏は幕府に返上し、「御上り地」(『書上』)となりました。

『書上』によれば、その後の元禄年中(1688～1704)には、越中島側を流れる大川筋(隅田川)の上総藩が埋まったため、土を浚い、その土

を「榊原越中守様御上地跡」地に捨てています。そのため、地高になり、正徳元年(1711)には御家人43人の拝領町屋になりました。その際、文政11年、『書上』当時越中島町の定行事をしていた平助の「祖父父平助」が預かり、地守役を勤めたようです。ちなみに、榊原家のように将軍に接見できる旗本と異なり、御家人はお目見えができない幕府直臣のことです。

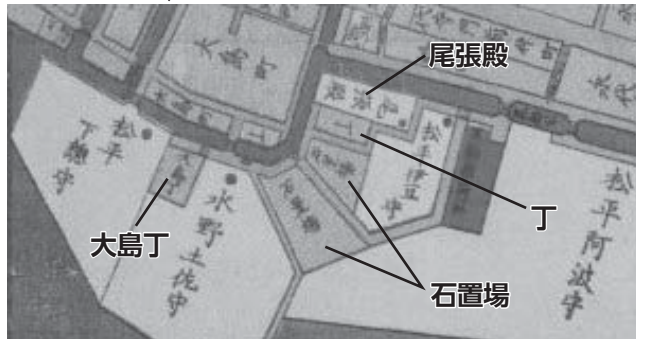
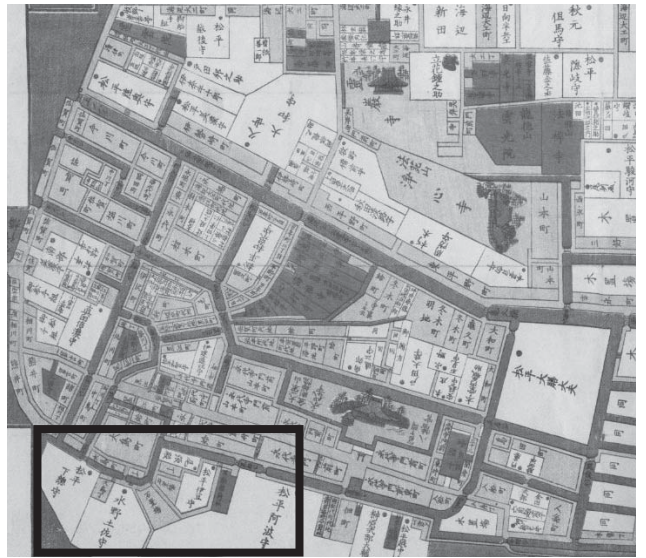
越中島町について

(1) 範囲

現在、越中島は1～3丁目までのかなり広い地域名となっていますが、幕末以降に進められた埋め立てにより、現在の形ができあがりました。江戸時代はもっと狭い範囲で、越中島の名称は、町として成立していた越中島町・越中島拝借地に見られるのみで、他には築出新地などが成立していました。

『書上』によれば、当時の越中島町は、総坪数1200坪程で、東は松平伊豆守下屋敷、西は大嶋町代地、南は曲淵日向守下屋敷ほか、北は川向大嶋町と境を接していました。家数は45軒で、内訳は家守(管理人)4人、店借り(借家人)16人、地借り(土地の借用人)25人でした。

前述の正徳元年から140年ほど経った嘉永5年(1852)に成立し



本所深川絵図(下は部分)

た「本所深川絵図」(尾張屋板、以下「絵図」と略す)の越中島あたりには、松平下総守と水野土佐守の2つの大名下屋敷(現在の越中島1付近)が見え、その隣に石置場(越中島1・牡丹1・古石場1付近)の記載があります。『書上』によれば、この石置場は、越中島町を拝領して以降、石問屋の石置き場として町が貸していたことから、地元で自然と「石置場」と呼ばれるようになったとあります。そのため、「石置場」は越中島町の範囲に含まれたと考えられます。

また、「総画図」を見ると、すでに松平伊豆守下屋敷が榊原越中守の拝領

地とは別に記されているため、「絵図」における越中島の範囲は、松平下総守、水野土佐守、大島町(飛地)、石置場、「丁」(町のこと)までということになると思われます。ただし、「尾張殿」が含まれるか否かは明らかではありません。

(2) 成立時期

つぎに、越中島町の成立時期についてですが、『書上』には、御家人の拝領地の地続きに、町奉行支配で1200坪の拝借地があったと記されており、この土地のちに越中島町になったものと推察されます。

この土地は、もともと御家人の拝領

地の内で、祖父父の平助が地守をしていましたが、「内海端」に(東京湾に面して)あり、波で「欠崩流出」する地所もありました。そのため、「打捨置」けば、またまた拝領地が残らず失われてしまったため、享保15年(1530)に町奉行諏訪美濃守に開発、築立てを願ひ上げ、許可をもらっています。その後何かと物入りの土地でしたが、丹精込めた場所ですので、町屋として家作御免(家の建築を許される)の拝借地に願ひ上げたのです。

その後、延享4年(1747)10月に町奉行馬場讃岐守から願ひが認められたことから、冥加金として1年に16両づつ上納をするようになり、現在まで続てきたとあります。

以上のように、越中島町は、享保期に築立てられて、のちに町場となったことがわかります。

おわりに

最後に、幕末の越中島についてお話しいたします。

越中島は、榊原越中守、そして御家人拝領町屋と移ったことから、もともと武家地として開発されたと考えられます。幕末期の「絵図」を見ても、やはり忍藩(埼玉県)の松平下総守と紀州藩(和歌山県)徳川家の附家老水野土佐守の屋敷がその大部分を占めてい

ることがわかります。ちなみに、附家老とは、江戸時代の初期に御三家(尾張・紀伊・水戸)を支えるため、各家の家老として附けられた徳川家家臣です。

当時、日本を取り巻く情勢は大きく変わり、18世紀末から日本周辺には外国船が出没しはじめました。その対応のため、幕府は江戸湾の海防(海の防衛)を強化しましたが、そのなかで天保13年(1842)、湾入口の房総半島の防衛を忍藩に命じたのです。翌天保14年、同藩は房総半島への手当てのため、越中島に屋敷地(「絵図」の松平下総守)を拝領します。その際、幕府は越中島の町人たち(この範囲に越中島町が含まれるか否かについては明確ではありません)に立ち退き料を払い、強制的に退去させました。その後、安政元年(1854)東隣の土地が幕府の訓練場になると、この屋敷は、元治元年(1864)に幕府に返上され、越中島には、元治2年2月までに砲台が築かれるという歴史をたどったのです。(『下町文化』251号「幕末維新期の越中島」、本号「講演録」参照)。

以上、越中島の地名由来、榊原越中守、越中島の範囲、町の成立の経緯などを通して、江戸時代の越中島について考えてみました。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

「最幕末期の江戸湾防備

―品川御台場と越中島御台場―

品川区立品川歴史館 富川武史

はじめに

今日のお話しの時代は、文久・元治・慶応期でして、特に品川御台場と越中島御台場の築造に関わった人々にスポットを当てて、最幕末期の江戸湾防備についてみていこうと思います（「御台場」という表記で統一します）。

I 吹き荒れる攘夷の嵐と

小野友五郎の海防論

品川御台場が造られるきっかけは嘉永6年（1853）のペリー来航ですが、越中島御台場が造られるきっかけは、9年後の生麦事件です。安政5年



（1858）に米、英、仏、蘭、露との条約が締結されたことで攘夷派の活動の活発化を誘発し、同7年の桜田門外の変をはじめとして、外国人や幕府要人への殺傷、襲撃事件が続発しました。生麦事件は、文久2年（1862）8月21日、橘樹郡生麦村（現在の横浜市鶴見区）において、イギリス人グループが、江戸から国元に帰る途中の薩摩藩の行列に遭遇し、殺傷された事件です。この事件を大きなきっかけとして、イギリスは幕府に圧力をかけてきます。そして、その後賠償金問題に発展し、応じなかった薩摩藩は翌3年7月にイギリスと戦争（薩英戦争）に入ります。結果薩摩藩は破れ、それまでの藩の方針を攘夷から開国、そして倒幕に転換していきます。同じく長州藩も下関戦争を経て、薩摩藩とともに倒幕に進んでいくのです。

一方、文久2年12月、幕府の軍艦方である小野友五郎が「江都海防真論」全7巻を幕府に提出し、江戸湾防備の再強化を上申します。小野は和算家の

出身で、咸臨丸の航海長を務めた人物として知られているように、測量、航海、天体観測、砲台設計などに強い人物です。この書は、砲台の築造方法や砲弾の飛ばし方など、技術論も兼ねた海防構想書となっています。この中で小野は、御台場を基軸とする警備体制によって、水際で外国人（船）を撃退するという基本理念（沿岸警衛体制）をもとに、台場の強化・増築と軍艦の建造を進言します。軍艦が何隻もできますと、それで敵艦を迎撃することができまうので、二重の防衛線を構築するように上申しています。

II 英国軍艦の品川沖渡来、

江戸湾防備強化の始動

生麦事件が賠償金問題に発展しますと、イギリスは幕府に対し、文久3年2月より次々圧力をかけてきます。代理公使ニールが幕府に殺傷行為に対する正式な謝罪と10万ポンドの支払いを要求します。一方、薩摩藩へは首謀者の即時処刑と2万5千ポンドの賠償金支払いを要求します。幕府は支払いを引き伸ばしますが、5月になるとイギリスが圧力を高めてきます。当時、軍艦奉行を務めていた木村喜毅と目付の杉浦梅潭の日記にその経緯を見ることができまう。イギリスは、横浜沖に12隻の艦隊を集結させ、そのうち2隻を

品川御台場のすぐ近くで停泊させ圧力を高めまう。これを受け、5月9日に老中格小笠原長行が賠償金を支払い、イギリス軍艦は退去します。

幕府では、ここまで圧力をかけられると、現状の台場を使った防備では守り切れないという結論に至ります。品川御台場は11基計画されたうち半分（6基）しか竣工していなかったため、工事が途中で終わっていた第四・第七両台場の築造再開を軸に、防備強化に乗り出します。これが、賠償金を支払ったすぐ後に具体化し、既に調査を終えていた小野と望月大衆が上申書を提出します。勝海舟が編纂した『陸軍歴史』に収められている「海岸御備之儀二付申上候書付」がこの上申書にあたりまう。両名はこの上申書のなかで16項目の強化内容を挙げておりまして、品川御台場を中心に沿岸の諸台場を整備して防備を固めるべきだと言っています。彼の本当の主張は、軍艦を完備して第一次防衛線を構築することなのですが、軍艦を建造し、また購入するには、お金も時間もかかってしまうため、急いで防備を固めるには台場を造れば一番早いという結論です。その場所には、品川の大井村から越中島までであり、海岸線に一定の間隔で台場を造って守りを固めるというものです。両名

は、上申書において、越中島町打場に触れ、佃島の東にある水路・上総濤を北上する敵船を迎え撃つための場所としていますが、御台場築造候補地としては挙げていません。越中島の御台場の築造が具体化するのには、上申書提出から二ヵ月後のことです。

Ⅲ 文久・元治・慶応期の江戸湾防備

幕府は、小野・望月の上申書に沿って、御台場築造に取り組んでいきます。最初の築造成功事例が、文久3年6月の浜御庭御台場（現在の浜離宮東南隅）です。この頃になりますと、越中島へ御台場を築造する動きが見られるようになります。同年7月3日付の「越中島海辺砲台築立ノ照会」（『陸軍歴史』所収）は、幕府の御警衛掛から講武所奉行に対して出された書簡です。内容は越中島の海辺に砲台を築造する場所を調べ、西方の堤内に砲台を築造するので、差し支えがあるかどうか聞きたいという内容で、急に御台場の築造が具体化したようです。

越中島御台場の築造を請け負ったのは、相模国三浦郡公郷村（現在の神奈川県横須賀市）名主永嶋庄兵衛と同堀内村（現在の同県葉山町）名主葉山市郎右衛門の二名です。「葉山市郎右衛門・永嶋庄兵衛申入一札」（永嶋家文書）では、品川第四・第七台場、佃島・越

中島御台場の築造のうち、相模・伊豆両国の石材の伐り出しから運搬までを請け負ったと書かれています。

次に、越中島御台場が竣工していたことを示す史料を挙げたいと思います。「奉願口上之覚」（永嶋家文書）は、元治2年（1865）2月頃に竣工していたことを示す史料で、近年の研究で明らかにされました。一方、同じ年の8月（慶応元年）の史料「浜御庭より越中島迄砲台御預之向江引渡相済候儀申上候書付」は、浜御殿、鉄砲洲、越中島などの五台場の各警備担当者への引き渡しについて書かれた史料で、浜御殿以北の警備体制が整ったことが分かるものです。

一方、品川御台場はどうなったかというと、第四・第七台場とともに築造途中で終わってしまっていて、第四台場は石組みの中腹ぐらいいまで積んだような状態、第七台場は海中埋め立ての状態です。これは、幕府が防備強化の要であった品川御台場よりも沿岸の越中島、浜御殿などの台場の築造を優先させた結果です。現在の品川第三・第六台場をご覧いただければわかりますが、越中島や佃島の数倍はあるかなり大きな砲台です。海上を埋め立てて造る必要がありますので、築造費用も時間もかかる

という理由で中止になったようです。その分、越中島や佃島など沿岸部の台場の完成が優先されたのです。

最後に、静岡県賀茂郡南伊豆町手石にある「記念碑」を紹介したいと思います。碑の正面に十一面観音像を線刻し、その他に工事請負者と造立趣旨、石材の伐り出し、運搬に関わった人々の名などを刻んだものです。造立趣旨は、文久3年10月より品川第四・第七台場と佃島・越中島御台場の石材を伐り出し、元治元年9月に終わったので、残石をもって碑を建てたという事が書かれています。請負者名は、永島庄兵衛と葉山市郎右衛門とあり、両名が石材伐り出しを引き受けていたことが、この石碑からも分かります。銘文だけを見ますと、石材伐り出しが無事終了したことを記念した碑のように思えますし、やはり地元でも記念碑とされています。しかし、なぜ十一面観音が刻まれているのかという点に疑問をもつわけです。私は、記念碑の意味もあるけれども、一方で伐り出し工事で亡くなったであろう人びとを供養する意味もあるのではないかと考えています。

まとめ

品川御台場をはじめ、周辺の台場は何の役にも立たなかったとよく指摘さ

れます。必ずしもそうではないということを申し上げて終わりにしたいと思います。今日は取り上げられませんが、1864年のイギリス側の史料では、日本との戦争を想定した計画が進んでいたことがわかります。これは、ブラウンという人のレポートに見え、品川御台場を注意すべきポイントとして挙げているのです。したがって、この当時、品川御台場は外国に対してある一定の脅威、抑止力になっていたのではないかと考えております。品川御台場は、越中島御台場を含めた沿岸の諸台場との二重防備体制となっていましたので、一連であの辺りの砲台には注意が必要だというように考えられていたと思われます。幕府の御台場の築造目的は、戦争ではなく、戦争回避の手段であったと思っておりますので、越中島御台場も同じ役割をもっていたでしょう。

ここは、明治に至り練兵場になりました。越中島御台場は埋め立てられてしまいましたけれども、御台場で使用されたと考えられる石材が残っており、その歴史をいまに伝えています。

※この記録は平成24年10月31日に江東区教育センターで行われた講演の要旨です。

旧大石家住宅の 年中行事

仙台堀川公園内にある旧大石家住宅は、江東区内最古の民家建築です。建てられたのは江戸時代の終わり頃、今から160年以上前で、地震や水害などの災害をくぐりぬけてきた貴重な建物です。旧大石家住宅では、季節ごとに



年中行事の飾り付けを行っています。今回は旧大石家住宅で実施している年中行事をご紹介します。

五月飾り

端午の節句にちなんで、区民の方から寄贈された五月人形を古民家内に飾ります。また、敷地内の庭に鯉のぼりを飾り、鯉の親子が空を泳ぎます。



七夕飾り

七夕にちなんで、庭に笹を飾ります。



来館された方に願う事を書いて笹に吊るしていただくように、短冊を用意しています。

また、保育園・幼稚園の園児の皆さんを対象にしたお話を開催しています。毎年、園児や来館されたお客様の短冊によって、笹が鮮やかに彩られます。

正月飾り

新年を迎えるにあたり、古民家の入口に松飾りと輪飾りを、また、古民家内の床の間には鏡餅を飾ります。



雛飾り

桃の節句にちなんで、区民の方から寄贈された雛人形を古民家内に飾ります。



す。通常、平日は休館している旧大石家住宅ですが、この期間には平日特別公開を実施しています。

平日特別公開の詳細については「こうとう区報」でお知らせします。

旧大石家住宅の年中行事は、「こうとう区報」で毎回ご案内しています。公開日には囲炉裏に火を入れておりますので、古民家の暮らしの一部を体験できることでしょう。皆様も仙台堀川公園の散歩がてら、気軽にお立ち寄りください。

利用案内

所在地 江東区南砂5―24地先
仙台堀川公園内
公開日 土曜日・日曜日・休日
時間 午前10時〜午後4時
料金 無料
交通 地下鉄東西線「南砂町駅」下車徒歩15分、都営バス「亀高橋」「東砂4丁目」下車徒歩5分

東京9区文化財古民家めぐり

江東区以外にも区内には文化財となっている古民家が保存されています。10月から11月にわたって開催される東京文化財ウィーク期間には、パネル展示やスタンプラリーを開催します。詳細は次号の下町文化に掲載予定です。

旧大石家住宅友の会

旧大石家住宅の保存活動を行うボランティアで、清掃や囲炉裏の火入れなどを行っています。文化財係では会員を随時募集しています。区内在住で平日の活動が可能な方、古民家の保存や地域の歴史・文化財に関心をお持ちの方は、区役所4階文化財係と旧大石家住宅に申込用紙をご用意しておりますのでお申込みください。不明な点は文化観光課文化財係(3647-9819)までお問い合わせください。



旧大石家住宅友の会の活動の様子